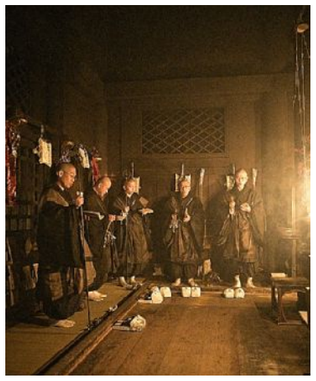
［承諾番号:23-1328］朝日新聞社に無断で転載することを禁じます。

修二会の声明　響く祈り



修二会で祈る練行衆＝奈良・東大寺、三好和義氏撮影

来月13日 特別公演

宮城学院女子大 大内典教授に聞く

5月には、奈良時代から一度も途絶えることなく続く東大寺の修二会の声明が特別公演される。修二会（お水取り）は東大寺二月堂で3月に行われる法会だ。声や音から宗教文化を研究する大内典・宮城学院女子大教授（音楽文化学）は「僧の覚悟を感じ、声明はまさに祈りの声」という。声明の意義を聞いた。

二月堂で声明を聴いたことがあります。音楽のように節のついたお経です。修二会の声明には、宗教儀礼に徹する潔さがあります。練行衆と呼ばれる11人の僧は2月から、精進潔斎し、厳しい行に臨みます。人々の罪を負って仏に懺悔し、平穏な生活や豊かな実りを祈る行です。その声明に音楽的な魅力があっても、目的は、ひたすら仏さまと向き合うことです。だから、人々の心を打つ響きになります。

僧としての生活の中で作られた体から出てくる声は、歌手や声楽家がボイストレーニングをして出せる声とは違います。ひたすら仏へ向ける、まさに祈りが結晶した声です。

修二会の声明には、俗に「南無観コーラス」として親しまれている「宝号」があります。二月堂の本尊の観音さまの名を「南無観自在菩薩」「南無観自在」と縮めていき、ついには「南無観、南無観、南無観」と繰り返します。これは、リーダーの僧に続いて他の僧が唱える、掛け合い形式で進められます。

修二会の空間では、声とともに音も大切な役割を担っています。たとえば、五体板と呼ばれる板に、ひざから打ち付ける「五体投地」の音。僧が自らの身を投げ出し、私たちの罪を懺悔してくれています。もっとも丁寧な礼拝の形ですが、聴聞者はそれを音で受け止めます。

来年、二月堂で営まれるときには僧たちが新たな輝きを放ち、修二会が長く受け継がれていく。今回の特別公演が、そのきっかけになってほしいと思います。

（聞き手・岡田匠）

■東大寺開山良弁僧正千二百五十年御遠忌記念特別公演「東大寺　修二会の声明」　5月13日（土）午後2時▽出演：東大寺一山僧侶ほか▽S席8500円ほか▽協賛：朝日放送グループホールディングス、関電工、ダイキン工業、大和ハウス工業、高砂熱学工業、竹中工務店、西原衛生工業所

シオン100年 大曲に挑む

日本で最も古いプロの交響吹奏楽団、オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラ。地元や吹奏楽ファンに愛されながら、今年創立100周年を迎えた。9月には節目の年を記念して、「第61回大阪国際フェスティバル」で特別演奏会「カルミナ・ブラーナ」を開く。

オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラの歩み

- 1923年　元陸軍第4師団軍楽隊の有志で「大阪市音楽隊」を結成。中央公会堂で記念演奏会を開催
- 1925　社団法人大阪放送局（現在のNHK大阪放送局）が大阪で初めて仮放送をした日、音楽隊が演奏した「君が代」などが流れた
- 1946　大阪市音楽団と改称
- 1970　大阪万博にエキスポバンドとして出演
- 1997　大阪芸術賞受賞
- 2014　大阪市直営から民営化
- 2015　Osaka Shion Wind Orchestraと改称

◀発足した当時の大阪市音楽隊

▲1970年、大阪万博にエキスポバンドとして出演した大阪市音楽団

主な創立100周年事業

- 10月6日～11月1日、大阪市立中央図書館で楽団のあゆみを振り返る記念展示会を開催
- 12月、米シカゴで開催される世界最大級の音楽イベント「ミッドウエスト・クリニック」に参加。「大阪俗謡による幻想曲」などを披露する
- 特設サイト（https://shion.jp/100th/）を開設。9月30日まで、クラウドファンディングを実施中

グラフィック・朝岡　遊

オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラ＝大阪市福島区、槌谷綾二撮影

市民に愛され 守り継ぐハーモニー

「大阪のまちから音楽がなくなっては困る」。オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラは、市民のそんな思いから生まれた楽団だ。

前身は、1888年に設置された陸軍第4師団軍楽隊。1920年代になって、国の財政が厳しいなか廃止されることになったが、存続を求める市民の声を受け、23年、「大阪市音楽隊」として再スタートした。以来「市音（シオン）」の愛称で親しまれる。

大阪市の財政改革で廃止を迫られ、2014年から自力で存続する道を選択する。変化を乗りこえながら歴史をつないできた。

現在は20～60代の団員31人が所属。コンサートや学校での演奏会をはじめ、春の選抜高校野球の入場行進曲の録音を担当するなど、全国区で活躍する。吹奏楽講習会やCDの自主制作といった活動も続け、吹奏楽界全体の牽引役も担う。

14年に音楽監督に就任した宮川彬良さんは、シオンの魅力を「ハーモニーに充実感や立体感がある。メンバーが代わっても、そうした音は不思議と変わらない」と説明する。芸術顧問の秋山和慶さんは「100年という歴史と伝統を持ちながら、音楽に真摯に向き合っている」とたたえる。

音楽監督の宮川彬良さん

芸術顧問の秋山和慶さん

これまで多くの人から親しまれてきたシオン。楽団長の石井徹哉さんは「これからも身近な存在として、なるべく多くの人に音楽を伝えたい」と語る。

9月の特別演奏会で指揮をする大植英次さん（大阪フィルハーモニー交響楽団桂冠指揮者）

シオンは長い年月、良い音楽をつないできたからこそ今も続いているのだと感じます。その伝統はメンバーが代わりながらも受け継がれ、継ぎ足されてきました。創業期、そして困難の時代を超え、「シオンで音楽をしたい」という信念を持ったメンバーのみなさまの思いや自主性を音に変えてお届けします。

管楽器の響きは多彩で、オーケストラとはまた違う豊かさに満ちていますよね。シーンによって細かく表現を変化させなければならないカルミナ・ブラーナこそ、管楽器にぴったりです。オーケストラでは伝えきれない曲の魅力をお届けできると思います。

「カルミナ・ブラーナ」ゲストを迎え

特別演奏会では、カンタータ「カルミナ・ブラーナ」（吹奏楽編曲版）のほか、「大阪俗謡による幻想曲」、「ダフニスとクロエ」第2組曲（吹奏楽編曲版）を披露する予定だ。

ドイツの作曲家カール・オルフによる「カルミナ・ブラーナ」では、シオン100周年として、大阪フィルハーモニー合唱団や岸和田市少年少女合唱団、ソロ歌手の3人を迎え、普段の定期演奏会ではなかなか実現できない大曲に挑む。

「大阪俗謡による幻想曲」は朝比奈隆が海外公演のために依頼し、大栗裕が作曲。関西交響楽団（現・大阪フィルハーモニー交響楽団）によって1956年に初演された。その後、大栗が編曲した吹奏楽版をシオンが74年に初めて上演したという縁がある。12月に参加する米シカゴでの音楽イベント「ミッドウエスト・クリニック」でも披露する予定。　（田部愛）

9月2日（土）

■祝100周年！オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラ特別演奏会「カルミナ・ブラーナ」　午後3時▽指揮：大植英次、大阪フィルハーモニー合唱団、岸和田市少年少女合唱団、独唱：老田裕子、清水徹太郎、青山貴▽S席8500円ほか。4月22日午前10時一般発売▽協賛：朝日放送グループホールディングス、京阪ホールディングス、竹中工務店

◇会場：フェスティバルホール
◇主催：朝日新聞文化財団、朝日新聞社、フェスティバルホールほか
◇チケットはフェスティバルホール（06・6231・2221、https://www.festivalhall.jp）ほか主要プレイガイドで販売